

エコニュース さって



第 31 号

平成 22 年 2 月 13 日
幸手市市民環境会議
(さって市民環境ネット)
TEL48-0331

今年(平成 21 年)の浮島つくいは、県のプロジェクトで「浮きウキフェスタ 21」 11月8日(日)

200 名の参加者で、1 日で 14 基もつくった!

11月8日日曜日、風もなくそんなに寒くもなく晴れた空のもと、場所は栗橋町と幸手市の境にできたばかりの権現堂公園。国道4号線と行幸湖に面していて、行幸湖の向こう側は五霞町。駐車場やトイレなどの設備も新しく、イベントにはもってこいの場所で、今回がたぶん初使用。



かねて行幸湖にて4年間、毎年2基ほどづつ浮島づくりを続けてきた、さって市民環境ネット(さちネット)は、埼玉県の「みどりと川の再生事業」にこの浮島づくりを応募し採択され、今年は県主催のビッグ・イベントに変身しました。会場では浮島づくりのほか、カヌー・ドラゴンボート体験、行幸湖写真展、水質検査体験、池の魚水族館、豚汁のサービスなど、テントがずらっと並んで来場者に説明やサービス。ステージ上では、上田知事が先頭に立っての「川の再生宣言」のかけ声、ハンドベルのライブ演奏やピンキッシュのコンサートなども。参加者総計1,200名にもなる盛況でした。

浮島づくりには、幸手市・栗橋町・五霞町の小学生や幸手・栗橋高校の生徒さん、幸手中央ロータリークラブ、幸手青年会議所、桜堤保存会、キューピー、コスモ石油、倉松探検隊、彩の国いきがい大学、エコクラブかぞなどの団体メンバー、そのほか応募してきた一般参加者など参加者は200名あまり。午前午後に分かれて、7基づつ一斉に浮島づくりをスタート、丸太と竹でイカダを組み、炭袋を作り、イカダにくくりつける作業や、できあがった浮島を竹のレールで岸に運び、次から次へとレール上を滑らせる進水式は圧巻でした。

14基分の浮島の材料をあらかじめいっぺんに用意することや、当日、複数並行して行われるイカダ作りをスムーズに行うために、事前に技術スタッフ育成の講習会を開くなど、NPOとよあしはらにとってもさちネットにとっても、例年の浮島づくりとはスケールの面で、なにかと初めての課題に数多く直面しましたが、何とかクリアー、とよあしはらとさちネットが主体となって担当した浮島づくりのイベントは、みごとに成功したと思います。県ではこのイベントを22年にも行う予定としていますが、次回は参加者をもっと多くなるよう、早くからのPRや、市内町内の小中学校・高校へのアピールを行い、今年以上のイベントになるよう期待したいものです。参加してくれた皆さん、サポートしてくれたさちネットの皆さん、ありがとうございました。また、お疲れさまでした。(久保田)

市民環境会議・さって市民環境ネットは、「環境基本計画」に市民の皆さんの声を織り込むために作業してきました。そして今、環境ナビ(幸手市HP)、エコライフDAY、中川探検、腐葉土づくり、浮島づくり、グリーンコンシューマー運動などの活動に取り組んでいます。あなたも参加しませんか。いつからでも誰でも参加できます。

問合せは、本田(42-8412)まで。

落葉リサイクルで腐葉土づくり

たくさん落ち葉を集めたよ！ 遊歩道がきれいになりました



<第49回 腐葉土づくりの会>

平成17年11月19日に始まった「腐葉土づくり」も5年目に入りました。

11月15(日)10時から、やや曇りの中で新規参加4名を含め16名が集って、自称若手で力自慢(?)の男性6名と落ち葉集めに分かれて、4段目の仕込み(落ち葉、米ぬか、乾燥汚泥土、水撒き)と切り返しを行いました。

冒頭、会長から7日の「市民健康福祉まつり」の環境コーナーで「腐葉土のづくりの会」も出展し、見学者の反応で市民へ徐々に腐葉土づくりが展開されているとの報告がありました。

環境課に既に集めて頂いた落ち葉と、しばらくぶりに前日の雨で落ち葉が濡れていましたが、桜泉園内と工業団地の遊歩道の林まで足を伸ばして落ち葉を集めて2基目の切り返しと仕込み、新たに3基目へ仕込み(計、4段目)を行う一方で、1基目は来年の2月の熟成を目指して新しい落ち葉を仕込まず2回目の切り返しだけを行いました。全員が切り返しと仕込んだ落ち葉踏みで汗をかきました。次回、12月20日(日)10時から集合を約束し散会しました(澤村)。

<第50回 腐葉土づくりの会>

今年も、3基の腐葉土ができるぞ！ 1基目は2月に使えるよ！

12月20日10時から、快晴、今年1番に冷え込みと年末の忙しい中、16名が集って5段目の仕込み(落ち葉、米ぬか、乾燥汚泥土、水撒き)と切り返しを行いました。

冒頭、会長から「エコニュースさって」が配布され、今年度も1月から3月までに4回に亘って中央公民館において市民環境講座を開催し、第1回目は1月23日(土)に「身近な資源『地中熱』」のテーマで講演があるので都合のつく人は参加するよう呼びかけがありました。

今回も、環境課に既に沢山集めて頂いた落ち葉と、更に運動公園の方にボランティアの方が集めた6袋を含めて、2基目と3基目に仕込みと切り返しを行いました。1基目は9月に仕込んだこともあり、かなり熟成していることが確認でき、前回と同様、仕込みは行わず3回目の切り返しだけを行いました。男性は切り返しと仕込みの力作業を、女性は落ち葉運びと後の整理を分担して行いました。切り返し作業で湯気がたって発酵しているのがよく分かりました。

最後に、「良いお年を迎えるように！」と挨拶して散会しました(澤村)。

<第51回 腐葉土づくりの会>

2月のジャガイモ植付けの準備のため熟成腐葉土撒きました！

2010年1月17日（日）、快晴、連日、庭の水道蛇口が凍る寒い中、10時から18名が集って3基すべての切り返しを行いました。

年初めの挨拶の後、会長から「エコニュースさって」（49回、50回の活動報告記載）が配布されるとともに、前月にも案内しましたが、1月から3月に亘って4回の市民環境講座があり、第1回目は1月23日（土）、中央公民館にて「身近な資源『地中熱』」のテーマで講演があるので参加するよう案内がありました。

事務局から作業手順を案内し、野澤顧問の先導で発酵して湯気が起っているのを観ながら男性人が交代しながら切り返し作業を進め、女性人は切り返し後の踏みつけ作業を行いました。先ず、1基目は略熟成されており、15個袋詰めを行った後、切り返しを行いました。15袋は、手分けして女性が中心となって来月のジャガイモ植付け予定の畑に撒きました。

2基目、3基目は2段目～5段目までの落ち葉を仕込んでいるため、湯気は起って発酵が進行中で、まだ落ち葉がそのまま残っていました。米ぬかと乾燥汚泥土を仕込み、散水して切り返しを行いました。これから数回2～3回切り返し5月までには熟成し、頒布、販売できると思います。

最後に、次回は2月21日（日）10時に桜泉園に集合し、ジャガイモ40kg（4種類）の植付け、一部切り返し作業と1基目の熟成腐葉土頒布を行いたいと案内し、散会しました。

（澤村）

“菜の花”だより

「さって市民環境ネット」（市民団体）は、いくつかの環境案件で地域活動を行っている。エコの主役“菜の花”はその中の一つで、これから具体的な活動をしようと計画している。幸手市権現堂桜堤の“菜の花”は、サクラと一体となり観光客を喜ばしているが、私たちは、環境の視点で、役目を終えた後の活用を検討している。

菜の花の起源は西アジアから北ヨーロッパといわれ、農耕文化と共にアジア、中国に移動してきた。菜の花は、弥生時代（BC10～AD3世紀）より、葉物野菜として食べられていたようだが、菜種油は江戸時代に入りはじめて行燈油として使用された。その後、大正・昭和にはいり、人々に食されるようになり、搾油が広く行われるようになった。しかし、戦後カナダ、アメリカから安価な食用油（キャノーラ油）が輸入されるに従い、急速に減少し、単に春を告げる代表的な花となった。景観植物としては、桜の開花時期と一致することや花の見栄えが素晴らしいことなどが重要で、当該地では品種名“農林20号”が最適なものとして播種されている。

90年代後半より地球環境の危機が叫ばれるようになり、何故か菜の花は全国各地で見直されるようになった。これは、それ自体環境保全と直結しないが、俳句や童謡で歌われるほど、日本人の生活習慣や食文化に深く関わり、利活用が広い植物だからと思う。地域活動では、環境に優しい資源循環型の代表であり、旬の食材、蜂蜜さらに香ばしい菜種油は、地産地消運動にも貢献している。

更に、注目のバイオ燃料（BDF）の素材として、話題性が高いことも挙げられる。この開発は、化石燃料に代わる地球温暖化防止の切り札として、各国の研究機関が懸命に行っている。サトウキビ、トウモロコシ等穀物由来（*）と同様、菜の花→菜種油→（精製）→ジーゼル燃料は、持続可能な資源の見本であり、地域のイベントで手軽に紹介されている。EUやブラジルでは、21世紀の燃料として社会に浸透しつつあり、そのための法整備も進んでいる。特にドイツは、菜種油からの抽出技術や生産から消費までの地域循環システム構築など多方面で世界をリードしている。国内では、京都市をはじめ多くの自治体が、廃食油由来BDFで市営バス、ゴミ収集車等を運行している。

エコの主演“菜の花”を検討するにあたり、権現堂桜堤の菜の花は課題が多い。“農林20号”は、世界保健機構（WHO）が心臓肥大に関連するとしてエルシン酸を多く含んでいることや、他方これを含まない食用油品種（ナナシキブ、キザキノナタネ等）は、景観植物としての見劣りが心配されている。このような背景のもと、以下に述べる県内外の事例を参考に活動案を作成したい。

その具体的な第一段階のステップや課題は、

- 権現堂桜堤の敷地の一部に“ナナシキブ”を播種し、生育経緯や交配状況を観察
- 景観植物としての“ナナシキブ”観察
- 子供たちによる菜種の刈り取りと搾油の体験学習
- 菜種油による食育
- 地域で活動する団体相互の協働 等々である。

（中山）

幸手のニュース

12月14日、権現堂桜堤の南端（約1反）に桜保存会の方々の手で植えたれた“キザキノナタネ”は、エルシン酸を含まない搾油用の菜の花です。

7～80cm間隔で筋植えがされましたが、間に落ちていた従来の種も同じように発芽したため、久喜普及部宮田部長の指示もあり、30日午後、私たち環境ネットの5名が立ち鎌で筋間の除草作業をしました。

キザキノナタネの若芽は、従来の“農林20号”（ミチノクナタネ）と明らかに異なった形状のハート型をしていました。

その後、桜保存会が手動耕運機で畝間を耕して除草をしましたので、本日の観察では、若芽が約10cm、綺麗な筋状で生育していました。

環境講座のお知らせ

3回目のテーマ 皆さんの力で菜種油を！

権現堂桜堤保存会やくらしの会の講演、菜種からの搾油実験、試食などを通じて、5月に開催する菜種の刈取りイベントについて考えます。

- ・日 時 平成22年2月27日（土）
- ・時 間 午後1時00分～4時00分
- ・会 場 幸手市中央公民館 講座室
- ・定 員 40名

問い合わせ&申込先 幸手市市民生活部 環境課

48-0331 環境担当まで